S. Ashina

＜前回：解放の神学３／アジアの解放の神学・韓国とインド＞

Ｑ：「解放の神学」と「土着化神学」という二つのベクトルは、両立するか。

から へ

Ａ．民衆神学の場合

（１）民衆神学の意義

「先立つ「黄色人種の神学」のように、民衆の神学は文化的・土着的に形成された神学ではなく、韓国において苦しんでいる民衆の文脈的神学であり、それゆえイエスによって祝福された全世界の神の国の民にとって開かれている。人権と公民権のための闘いと結びつけられ、キリスト者たちを「教会の民」から「民衆の信仰共同体」にする限りにおいて、民衆の神学は、韓国における最初の政治神学でもある。」（モルトマン『神学的思考の諸経験』新教出版社、312）

（２）発端あるいは文脈

「民衆の神学は、一九七〇年代の韓国の民衆の自由を求める闘いの中で形を形成してきたことは事実である」（李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984 年、1 頁）、「しかし、その根は決して浅いところにない」、「韓国教会の一〇〇年に及ぶ歴史を読めば読む程に、信仰理解は伝統的に保守的でありながら、宣教の当初から日帝の植民地支配の抑圧からの解放の希求と闘いの歴史的文脈の中で福音のメッセージを聞いてきたことがわかる。」（李仁夏、2）

「「民衆の神学」は韓国のキリスト者を中心とする民主化闘争から生まれてきた神学である。そのことは、一九七六年三月一日に出された「民主救国宣言」の署名者たちが、同時に「民衆の神学」の中心的指導者であることに端的に示されている。」（木田献一、2）

（３）韓国民衆史の中で

李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編

『民衆の神学』教文館、1984 年。

「韓国における民衆と神学――アジア神学協議会についての伝記的報告」（徐洸善）

「徐南同はその「二つの物語の合流」についての論文において、現在の民衆の神学は、現在に対して歴史のパラダイムを提供している、以前の歴史の続きなのだと論じている」

「(一九一九年の）三・一独立運動」「(一九六〇年の）四・一九（学生）革命」「今日の韓国人が、自らの主体性をはっきりさせるとき、東学運動―独立運動―三・一運動―四・一九革命という系譜を自分たちの民衆運動の系譜として述べること」（李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984 年、30 頁）

「彼が試みているのは、まず最初にその文学、感情、演劇等に現われている民衆の社会的伝記を読み、そこから民衆の歴史の動態を描き出すことである。」（32）

「徐が観察しているように、「儒教の厳しい女性差別強要のもとでは、女性の存在は恨そのものである」」、「恨は韓国女性の伝記や物語、小説、詩、劇等に避けがたく現われてくる、心理・社会的用語である」（33）

「民衆神学の根を探ってみると」「更に探ってみると遠くは五千年の民族文化の遺産に土壌に根付いており、近くは一〇〇年余年の韓国のキリスト教の民族・民衆的伝統の血脈野中に着実に根を下ろしていることがわかる。」（27）

（４）聖書の文脈で

・「「民衆を発見するまで」と『ガリラヤのイエス』で、安炳茂は、かれが西欧の学問的神学を脱して、ついにテキストの背後の「イエスの民衆」を探しだすまでの長い道程を述べている。その概略を記してみる」（106）

「神学の「問い」が変わる。これは「民衆の目で」見るというのと同じである。すなわち、視座が変わるのである。その問いが聖書の中に解答を求め、聖書の「民衆」（オクロス）を発見するようになり、そのオクロスの現実と今日の民衆の現実が共鳴を起こし、伝統的な答えとはまったく異なる「答え」を得るようになった。この場合、「問い」は民衆の問いであり、「答え」も民衆の答えである。」（108）

・「問いと答え」の思考構造、神学思想の解釈学的構造。
「福音書のなかでイエスは、ただ「イエス民衆」としてのみ存在する。だから「イエス民衆」はイエスの別の名前だ。ここで、西洋神学の「イエス」と「民衆」という「主客図式」は立場を失う。」(107)

（５）二つの物語の合流

「「二つの物語（聖書および教会史の民衆伝統と韓国歴史の民衆伝統）は合流した。民衆神学者たち、とくに徐南同と安炳茂の信仰と人格の中から激烈で劇的な「合流」が起こった。」(111)
「キリスト教の民衆伝統と韓国の民衆伝統との合流」、「韓国の民衆神学の課題は、基督教の民衆伝統と韓国の民衆伝統が、現在韓国教会の＜神の宣教＞活動において合流していることを証言することである。現在目の前に展開している事実と出来事を、＜神の歴史介入＞、聖霊の歴史、出エジプトの出来事とであると知ってそれに参与し、それを神学的に解釈する仕事である」(李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984 年、307 頁)
「金芝河の民衆神学」「『張日譚』の構想メモ」(308)
「韓国で二つの物語が合流した一つの模範的事例として金芝河の「張一譚」の物語を取り上げている徐南同は、その神学的意味をこのように述べている。「張一譚」の会報の福音は神学の土着化を決定的な課題とする。金芝河はイエスの物語である福音書と民衆の恨の物語であるパンソリを結合しようとするものである。そうして韓国的、民衆的神学を形成してみようとする。パンソリの辞説である「張一譚」の物語は、イエスの話の記録である「ヨハネ福音書」の進行と似ている。」(250)
「《メシが天であります・・・》」(248)

Ｂ．ピエリスの場合

Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.

1）貧しさという指標
　宗教的現実性の構造　→　儀礼、精神性・霊性、世俗
　神と富、富という複合的現実
　　救済宗教としてのキリスト教にとって、罪とはいかなる現実性か
　　政教分離論の改訂＝公共性の再構築
2）アジアの教会と、アジアにおける教会。in / of
3）土着化神学と解放の神学　→　二分法あるいは二分法を超えて
　　「アジアの」と「解放」
　　適応と変革
4）土着化：誰の文化か。
　　アジアにおいて、従来の土着化モデルは有効か。
　　アジアの宗教文化は、古代から中世にかけてのギリシャ・ローマやゲルマンのそれとは異なる。ラテン・アメリカの解放の神学についての二重の評価。
5）宗教概念の再構築
　宗教と文化の二分法の限界
　宇宙的とメタ宇宙的宗教　→　宇宙的宗教を考慮できること
　心理学的と社会学的
　　宇宙論と家族・国家
6）非キリスト教的宗教伝統・宗教文化における解放の希求
　宗教に対するふさわしい評価。of / against
　アジアの伝統的宗教文化における「宗教社会主義」
　　西欧近代のキリスト教社会主義や宗教社会主義との関係
　　農業の意義（アジア的農本主義）

アジアの伝統への参与において生成する「アジアの教会」
↓
地平融合の一つの形
「アジアのキリスト教」の可能性

7）近代化の再評価
↓
宗教文化を適切な仕方で理論的に分析すること。
その上に、宗教の神学を構築する。現代神学の課題

８．科学論の神学――パネンベルク

（1）科学論の神学

１．現代神学後半（1970 年代から現在）の諸動向で。
「解放の神学」系の問題と、「科学技術とキリスト教」系の問題。

２．弁証法神学から再度自由主義神学的問いのテーマ化。
近代文化（近代的諸学）の中におけるキリスト教（神学）、神学の学問性という問題
シュライアマハー（ドイツ古典哲学）、トレルチ（歴史主義、カント学派と新しい思想動向）、ティリッヒ（歴史主義、カント学派と新しい思想動向と、その後の思想世界）、そしてパネンベルク（論理実証主義から批判的合理主義へ、解釈学）

３．未分化→分化・内的緊張→分裂→対立→無関係・分離→対話・協力あるいは再統合
17、18、19、 20 世紀 1970 年代
争点：12 世紀ルネサンス、コペルニクス・ガリレオ問題とカルヴァンの聖書解釈学、ニュートン主義とマートン・テーゼ、進化論と科学者集団の登場

４．「宗教、科学、そして哲学の対立の時期は原理的には過ぎ去った。もちろん、より古い思想時代に逆戻りしてまだ生きているような人も存在してはいるが。我々は寛容の時代に生きている。しかしそれは満足のゆくものではない。なぜなら、それはお互いを認め合ってはいても、統一することはないからである。……我々は常に再統合の時期に向かって努力している。……協力は今日可能な事柄である。これは多くの場所において始められており、これがますます力をまして現実のものとなるという希望を私は表明したい」。（Paul Tillich, Religion, Science, and Philosophy 1963, In: J. Mark Thomas（ed.）, *Paul Tiilich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer 1988, p.172）

５．現代の状況あるいは２１世紀の方向性（未決定）
(1)過去（19 世紀・対立）への逆行
(2)20 世紀的現在（無関係・分離）の反復
(3)新しい関係構築（対話・協力・再統合）、現代のキリスト教思想の全般的動向

（2）パネンベルク

６．歴史学とキリスト教信仰：弁証法神学を乗り越える試み。
パネンベルク、「啓示に関する教説についての教義学的諸命題」（『歴史としての啓示』聖学院大学出版会）（1961）
命題一：聖書の証言に従えば、神の自己啓示は神顕現のように直接的ではなく、神の歴史行為によって間接的に生じた。
命題二：啓示は啓示的歴史の始めにおいてではなく、終わりにおいて見いだされる。
命題三：歴史の啓示は、神性の特殊な顕現とは異なり、見る目を有するすべての人間に開かれている。それは普遍的な特色を持っている。
命題四：神の神性の普遍的な啓示は､なおイスラエルの歴史においては実現されておらず、そこにおいて、全歴史の終わりが先取りとして生起しているという限りにおいて、ナザレのイエスの運命の中ではじめて実現した。
命題五：キリストの出来事は、孤立した出来事として、イスラエルの神の神性を啓示して

いるのではなく、キリストの出来事が、イスラエルとの神の歴史の一部である、という限りにおいて、神の神性を啓示しているのである。
命題六：異邦人教会における非ユダヤ的啓示表象の形成には、イエスの運命における神の終末論的な自己証示の普遍性が表現されている。

・森田「彼のテーゼンした個々のテーゼは、きわめて論争的な性格を示し、その当時まで主流をなしてきたバルトとブルトマンに対する批判を示唆」、「とりわけ将来的終末論と、終末の先取としてのキリストの出来事だけが強調される評価態度」（177）

７.『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
『学問論と神学』『人間学――神学的考察』における神学の学的基礎の議論に基づいて、『組織神学』（全三巻）へ。包括的な問題状況を視野に入れて神学を構想する。

８.『学問論と神学』教文館（1973）。
序論　学問論と神学
第一部　諸学問の統一性と多様性の緊張における神学
　第一章　実証主義から批判的合理主義へ
　第二章　精神科学の自然科学からの解放
　第三章　意味理解の方法論としての解釈学
第二部　学問としての神学
　第四章　神学史における学問としての神学の理解
　第五章　神についての学問としての神学
　第六章　神学の内的区分

・森田「分析哲学、とりわけK・ポパーの批判的合理主義の哲学に深い共感を示し、いわば構造主義的機能主義の神学とも言うべき性格」「現代のサイバネティクスへの深い関心を示す神学探究方法」（177-178）
「神についての＜科＞学」（178）というパネンベルクの主張。 cf. トランス、ヒック
「神は、他の経験対象と共に措定される（mitgesetzt）意味総体性（Sinntotalität）であり、「いっさいを限定する現実」である。第二に、神は間接的に、反省を通して論証され把握される。」(179-180)
「神学は対象とその処理についての明晰な「知」の明るみにまで到達することを求め、直接性の立場における宗教的経験の直接的対象把握を、さらに「間主体的」(intersubjektiv)な妥当性にまで仕上げ、宗教的言語によって言明されるかぎりの対象の究極的な意味連関を、説明しようと試みる。」、「神学に認識努力は、宗教的主張についての間主体的な合意と妥当性を求めることに向かう」、「認識と主張的言明は、神学においても不可分である。」(180)
「神学はこの主張命題を素材として、対象たる神の意義連関と、神についての諸言明との首尾一貫した究極的意味連関とを探究する」、「直接的な宗教経験は」「神学的地平から脱落することになる」(181)
「神は他の対象を超えつつ共に措定される対象であるが、しかも神学的言明はつねに「仮説」(Hypothese)にとどまる」、「ポパーやH・アルバートの批判的合理主義が意味する「仮説」とほとんど同じ」（182）
「ある対象について科学的説明を試みる仮説は、一方ではそれ自体の首尾一貫した論理性を有する意味連関を要求されると同時に、他方では常に個々の基礎命題の観察可能であることを要求される。同様に、神学においても、神についての言明全体は、一方では言明の含意(Implikation)によって測られ吟味されて、矛盾のない首尾一貫した意味連関を有するものとして示されねばならない。他方また、神についての言明は、それについての世界と

人間の経験的言明によって、真であることを証示されなければならない」、「しかし、神の自己告知についての言明も、経験における真理性の証示も、共に未完結であり、その最終的帰結はなお将来に開かれている。そのかぎりでは、神思想はなおも未完成であって、絶対的真理そのものではなく、絶対的真理を目指す仮説にとどまり、なおも無限の試行錯誤の可能性をふくんでいる。仮説とは、神思想の探求の途上にあることを意味する。」(183)
↓
歴史の全体、宗教史が問題となる。

９.『人間学――神学的考察』教文館（1983)。
『組織神学』全三巻（1988/91/93）

10. 現代思想（哲学）と自然科学という文脈での神学
『自然と神――自然の神学に向けて』教文館（テッド・ピータース編、1993）
編者による序論――神学と自然科学におけるパネンベルク（テッド・ピータース）
第 1 章　科学者に対する神学的問い
第 2 章　創造と近代科学
はじめに／神学問題としての慣性／自然についての説明としての神の概念／創造と偶然性／場と霊（spirit）／時間と空間／創造における被造物／結論
「良心的に見るならば神学者は、自然科学者によりわれわれに与えられた自然についての記述を完全なものとして単純に許容することはできないということである。確立された」学問の国境の中で働いている科学者が単純いに報告してきた以上のものが自然にはある。・・・自然の出来事の中に偶然性を認めることは、われわれが自然の法則の偶然性を理解するのを助ける。そしてこのことは、自由な神的創造者による被造物として自然全体を理解することから離れては説明されない。力の場の概念は、それの歴史的起源についても、それの組織的連関の点からも、神学者によって注意深く評価される必要がある。」(81)
紀元」でｋ木々と二語らいテイルはタラして著るｋッ要する両人的に」
「神学者としてのわれわれの務めは、あるがままの自然科学に関係を持つことである。われわれ自身の科学を作ることはできない。しかも、もしわれわれが自然を適切に理解すべきならば、われわれは科学が与えるものを越えなければならず、また神の理解をも含めて考えなければならない。」(82)

第 3 章　神と自然――神学と自然科学との間の闘争の歴史
第 4 章　偶然性と自然法則
第 5 章　霊の教説といわゆる自然の神学の役割
第 6 章　霊（Spirit）とエネルギー
第 7 章　霊（Spirit）と精神（Mind）

11. 社会科学や人文科学への広がりが弱い。

＜参考文献＞
１. Molfhart Pannenberg, *Natur und Mensch---und die Zukunft der Schöpfung* (Beiträge zur Systematischen Theologie Band 2), Vandenhoeck & Ruprecht, 2000.
２. 森田雄三郎「神学的構造主義の問題」(1983)（『現代神学はどこへ行くのか』教文館、2005 年、176-196 頁）
３. 芦名定道『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
４. 近藤勝彦の一連の諸研究（きわめて多い)。
５. 茂牧人・西谷幸介編『21 世紀の信と知のために――キリスト教大学の学問論』新教出版社、2015年。

＜補足＞

T. ピーターズ、R. J. ラッセル、M. ヴェルカー編

『死者の復活　神学的・科学的論考集』日本キリスト教団出版局、2016 年。

芦名定道

復活は、キリスト教信仰にとって核心的な事柄に属している。しかし同時に、復活は多くの現代人にとってはまさに躓きの石とでも言うべき問題であろう。近代以降、神学においても、この躓きの石を取り除くさまざまな努力（本論集では客観主義と主観主義に分類される）がなされてきたが、近年、復活をめぐる問題状況は新たな段階にさしかかりつつある。この問題状況を代表する論文集が邦訳され、日本の読者も復活をめぐる新しい思想動向に触れることが可能になった。それは、二〇〇一年にハイデルベルクで開かれた国際フォーラムの成果出版であり、そこには著名な科学者や神学者が、多く名前を連ねている。科学者と神学者が正面から「復活」に挑んだ一八の論考が、編集者の一人であるテッド・ピーターズの序論に続いて、四部（「第一部　復活と終末論的信頼性」、「第二部　体の復活と人格の同一性」、「第三部　復活と自然法」、「第四部　復活、新しい創造、そしてキリスト教的希望」）に分けて収められている。本論集で扱われる問題は多岐にわたり、一つひとつの論考の性格も多彩であるが、本論集の基本的な構想・特徴については、ピーターズによる「序論」などから、読み取ることができる。以下、本論集の注目すべき議論の一端を紹介してみよう。

「復活」問題にアプローチするために、本論集の諸論考では、現代科学とキリスト教思想という二つが基礎資料として用いられるが、前者には宇宙論・物理学、生物学、脳科学などが、そして後者には聖書（ルカ文書とパウロなど）とキリスト教思想史（オリゲネス、ニュッサのグレゴリオス、アウグスティヌス、シュライアマハー）が含まれる。この多様な資料によって問われるべき中心テーマとして挙げられるのは、「復活」に関わる「同一性」の問題である。すなわち、キリスト教的復活理解の基本である「体」の復活について言えば、まず問われねばならないのは、キリストの「復活前の体」と「復活後の体」との同一性をめぐる問題であり、それは「体」に関する現代科学（生物学）の議論とも関連しつつ、「連続性と非連続性」の問題として定式化される。本論集では、この「連続性と非連続性」という定式はさまざまな文脈で繰り返され、たとえば、われわれ人間の終末における復活の場合には、現在の体と復活の際の体の「連続性と非連続性」となる。「霊の体」（パウロ）が何を意味するかは、この点に関わっており、本論集では、「古いものからの再創造」（「無からの創造」とは異なり、また自然的なプロセスにおいて可能となるものではない。それは神の恩恵・贈与である）の議論へと展開される（ラッセル、デイリーら）。

この「体」における復活の対極にあるのが、現代科学において構想される「サイバネティックス的不死」（人の脳のパターンを機械に移すこと）であり、それは人間の人格的同一性の問い直しを要求する。これに対して、マーフィーは非還元的物理主義の立場から、復活の前後で問われる人格の同一性（連続性）には、記憶の連続性では不十分であり、「われわれの道徳的性格」が不可欠であると主張する。ともかくも、現時点において、サイバネティクス的不死は「空想科学小説」（ヘルツフェルト）の域を出ない。

では、世界の終末（科学的宇宙論は宇宙の未来像を「熱的死」として描く）や人間の死を超えた、復活前後の「同一性」は、最終的にどこにその根拠を求めうるのだろうか。本論集で示唆されているのは、「神の誠実さ」、「神の記憶」という論点である。もちろん、「神の記憶」についても、どこまで理性的探究が可能か、「最後の審判」とどう関係するのかなど議論は尽きない。本論集を通して、神学と科学とが復活をめぐる創造的対話に招かれていることを確認することは、現代世界を生きるキリスト者にとってきわめて意味深いものと言えよう。